様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２２ 日現在

機関番号：３２５０８
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ０１１７４

研究課題名（和文）サラワク・イバン社会における居住空間の現代的再編成に見る社会的強靭性

研究課題名（英文）Tenacity of Sarawak Iban society seen from modeernization of their living space

研究代表者
内堀　基光（Uchibori, Motomitsu）

放送大学・教養学部・名誉教授

研究者番号：３０１２６７２６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の成果として、サラワク州の各地方に在住するイバン人の現代化された集住ロングハウスを20軒以上観察し、そのうち4軒については一定の深度と数値をもったデータを得ることが出来た。実際にこの観察数ではサラワク州の全土にかけてのロングハウスの現代化にともなう諸現象、社会的・経済的背景を分析するには不十分であるが、聞き取り調査にもとづく住民の主観的認識を描くことは可能である。調査期間中は同時に古い型のロングハウスに関わる回想的知識を収集することにも努めた。これによって、イバン人の集住形態の長期にわたる安定傾向と構造に関する地域的変異を追究しえたことになる。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究による成果は、急激な生業的・経済的変化の只中にある島嶼部マレーシア（ボルネオ島）の非ムスリム系在地民（イバン人）社会の社会構造と家族構成の基層の持続性、およびそれと相たずさえて発現している民族意識の強靭性を明らかにしたといえる。その限りでは、この成果の社会的意義は地方的な限界をもつとはいえ、ここから発して東南アジア島嶼部の在地民社会に広く見られる「イエ中心社会」（house society）の今日のグローバル情勢と国民国家体制内での持続の現実態の一範例を示しえたことは、この地域の民族学的知見に寄与する学術的意義があったと考える。

研究成果の概要（英文）：Observation reseach was conducted on more than 20 Iban longhousese in various parts of Sarawak, most of which are regarded as 'modernised' in one sense or another. Quontitative data with certain depth were obtained from 4 of those longhouses.Admittedly, this amount of quontative data is not sufficient for getting to a decisive conclusion on multiple aspects of the modernisation of longhouses, including, above all, socio-economic background factors, from the state of Sarawak as a whole. However, the total hear-say information obtained during the research period enables enables us to describe subjective views of the residents in question on the topic. Their recollections of oler forms of longhouses, which I tried to record sometimes with graphic designs, are important when we discuss the long-term stability of their redidential forms as well as local variations of the physical structures of the longhouses.

研究分野：民族学（ethnology）

キーワード：イバン社会　ロングハウス　集住　現代化　社会構造　生業

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

本研究は、居住空間の再編成という可視事象を基盤に、マレーシア・サラワク州に住むイバン人の現代状況への適応様態に全体論的に接近し、国民国家における少数民族集団の社会的強靱性を解明することを目的とした。

彼らの生活を特徴づけるものはロングハウス（集住長大家屋）であり、この居住形態は現在でも州全土で基本的に維持されている。だがその外観と内的空間配置は大きく変貌している。家屋規模は大型化し、世帯居室の形式は 1 室型から複数部屋型へ、素材は木材からセメントに、建築方式は高床式から着地式に変わりつつある。居住空間の再編成は個人の身体管理のあり方を変えるとともに、世帯（家族）成員間の関係、村落内の人間関係に関わる行動の実態から規範に至るまでを刷新しつつある。これらの変化は現代性の浸透とみなしうるが、集住形態は同時に旧来のエートスの持続を担保するものでもある。この逆説的な刷新と持続を社会的強靱性の内実と措定したところから、本研究を進めた。

本研究の学術的問いは、当初から二重の構造をもっていた。一つは長い射程の問いであり、現代の国民国家の内部で少数者とされる在来（先住）の住民集団の成員が、その民族的・文化的アイデンティティを保持しつつ、進行しつつある政治・経済・社会的な変化に強靱に適応していく可能性を問うことであった。国民国家内の先住民族の生活・生存状況を問うものとしては、住民の苦境とその要因の探究を目的とする研究が一般的だが、それに比して、本研究の問いはやや微温的に響くかもしれないが、本研究の対象とするマレーシアを含む東南アジアの国民国家においては、一方では絶滅の危機に瀕するような民族集団が存在するともに、他方では、同じく先住とされる住民でありながら、さまざまな度合の強靱性をもって現代の政治経済状況に適応しつつある集団が目立つことも確かである（たとえば清水展『草の根グローバリゼーション』が描写するフィリピン・イフガオ社会）。こうした集団の、現代性へのいわば正の適応を実証的に検討することは、グローバリゼーションと国民国家という普遍状況へのローカルな場における実効的対応を探ることであり、それを通じて究極的には、少数民族を包含する国民国家そのものの将来にわたる存続の要件を追究することに繋がる。その点でこの問いの現代的な意義は依然として深く大きいと考えた。

第二の問いは、マレーシア・サラワク州（ボルネオ島西部）のイバン人社会において、居住空間の配置の改変・再編成が人びとのどのように行動コードに影響を与えているかという、より具体的で目に見える事象に関わる問いであった。第一の問いと比べるとその射程は短く、学術的には些少な民族誌的関心しか惹かない問いのようにも見える。だが、長屋式の集住家屋（英語でロングハウスとで呼ばれてきた）に住むイバンの場合、居住空間はローカルな人間関係が直接的に体現される場であり、さらにはこの人間関係を媒介として、大きな政治経済環境を間接的に映す鏡である。その居住空間の再編成は、日常生活の細部にわたる行動（食事、睡眠、排泄、男女の交際など）のコードを刷新しつつも、集住共同体（自然村）としてのロングハウスの根幹的機能を維持している。刷新された要素と維持されている要素の均衡という状況の中に、イバン社会の強靱さを読み解くことが出来ると考えた。このことは第一のマクロな問いに対して実証的に答えていくことを可能にし、さらには、個人の身体性に関わる行動コードというミクロな事象とグローバリゼーションにまで関わるマクロな地平の連鎖の実態（実体でもある）を辿るという、学術的に広範な地平を拓く追究となるという目論見のもとで研究を進めることになった。

２．研究の目的

本研究の目的は上の 2 つの問いに答えることであるが、以下、具体的な個別事象項目を挙げ、項目間の関係についての仮説的説明を提示することにより、本研究の特質を述べることとする。ある社会の強靱性という一見とらえがたいところのある評価概念を、可視的な居住空間のあり方、およびそれと連動する行動コードの変化（持続と刷新）という生活基盤の平面から接近するところに、本研究の独自性があった。

歴史的に見て、世襲の首長や身分制の存在しない「平等主義」的な社会関係を基軸とするイバン社会は、J・スコットが描くところの「ゾミア地帯」的な社会、すなわち中央権力による統治から逃げる共同体から成る社会であったと特徴づけられる。ロングハウスの住民共同体（「ロングハウス共同体」）は、そのような全体状況の中で、かつては自律的な村落であり、19 世紀中葉からのブルック国家（「白人ラジャ」による国家）による統治以降も一定の自律性を保っていた。陸稲の焼畑耕作者としてのイバンは、ボルネオ島における他の焼畑耕作民と比して移動性が高いと指摘されてきたが、平等主義と高移動性の複合の基盤が、森林を含む大地の占取母体でもあるロングハウス共同体であった。この共同体エートスの根幹部分は、マレーシアの一州としての独立から半世紀以上経った現在でも、ロングハウスの「通廊」で開かれる住民集会の折などに明瞭に発揮される。高移動性に応じて、旧来のイバンのロングハウスは、ボルネオ島における他の民族集団の集住的住居と比べると、比較的小ぶりで、高床式の小屋の接合体のようにも見える簡素な建築だったが、イバンの生の様式に関わる濃密な象徴性を付与された居住空間であった。

しかるに、この 30 年間、とりわけ 21 世紀に入ってからは、見かけや内部空間の配置が大き

く変わったロングハウスが急増したという印象を受けている。外形的には木造からセメント造りへ、高床式から着地式へ、平屋建てから二階建てへと変わり、規模も町中のテラスハウス並みかそれ以上に大型になってきた。内部的には、ロングハウスを貫く通廊がタイル床で統一されたデザインとなり、通廊と居室の仕切り壁にガラス窓がつけられるなど「現代的」なインテリアが備えられるようになった。とりわけ住民の日常行動コードに直接作用する居住空間上の再編成は、居室内部での炊事場（食事部屋を兼ねることが多い）の居間兼客間空間からの分離、トイレ・水浴び部屋の設置、仕切りをもった個室的空間の出現、物置（かつ昔は少女たちの寝所）として使われる屋根裏空間から人の住まえる二階部屋への拡張、などである。

こうした「現代化」を可能にした直接の要因は定住性の進展と現金収入の増大である。かねてからロングハウスの恒久化傾向は漸次強まってはいたが、この間ほとんどのイバン居住地域において、陸稲から換金作物（地域によってコショウあるいはアブラヤシ）への「全面的」と言える転換――しばしば稲作放棄にまで至る――が進んだからである。ロングハウスの位置が固定したことにより、地域によっては水道、電気という公共サービスが届きやすくなりもした。

こうした空間の再編成、とりわけ衛生部分や炊事場の分離は、共同体から離れた世帯（家族）単位での私的な空間の確立であると考えられ、また居室内部での個室の設置は、世帯内部での成員個人あるいは夫婦単位の私的時間の空間的確保だと言える。行動コードはそれに応じてプライバシーを増大する方向に転じてゆく。その意味では居住空間の再編成は、生活形態そのものの分かりやすい「現代化」であると括ることができる。だが、本研究で追究する枢要な問題は、この変化にもかかわらず、都市化されたごく一部の区域を除けば、イバンのロングハウス集住への嗜好とも言うべき癒やしがたい志向が、きわめて強いかたちで持続しているということである。一見すると、適応的な現代化としての刷新と集住志向の持続はパラドックスである。このパラドックスを認めた上で、そうした「逆説的均衡」がいかにして成立しているかを解くことから、社会的強靱性の問いに接近することを、本研究の新たな視点として採ることとした。

３．研究の方法

物理的建築物としてのロングハウスに着目したとき、上のパラドックスを解く鍵が「通廊」の存在と役割にあると見ることを中心に研究を進めた。ロングハウスを長軸に沿って貫くこの空間は、農耕儀礼をはじめとする共同体全体での祭儀を行う広場のような公共空間でもあり、また日常的には住民がそこに自らの身を現わすことによって社交性を明らかにする「公私の界面」と言うべき空間である。集住共同体がその共同性を可視化する上でもっとも効果的な空間である通廊は、それにもかかわらず、本来的に世帯単位で作られ維持されなければならない私財でもある。これらの意味で通廊は「閾的」（リミナル）空間であり、伝統的なイバンの家屋シンボリズムでも、生の世界から死の世界に至る移動の「道」であるように語られる。また往時はすべての男の客人（および共同体の未婚の男子）は居室内部ではなく、閾域としての通廊に寝泊まりすることになっていた。ロングハウスが「長い」ものであるメリットは何よりもこうした通廊の機能として現われると考えられた。

閾的空間あるいは「界面」としての通廊は住民同士だけでなく、彼らと訪問者（友人・旅人から諸レベルの行政担当者・政治家に至るまで）の出会いと交渉の場であり、ここでの人びとの「やりとり」は、ローカルな社会過程の公開部分の最大の情報源となる。それはまた逆に、こうした場では何が語られないか（情報の「秘匿」のあり方）を浮き彫りにもする。イバン人のあいだでの民族誌的な仕事は、まずはここから始まると考えた。

本研究の手法も、こうした情報の収集といういわば伝統的な民族誌調査法にしたがったが、最大限広域にわたる調査をこころがけ、サラワク州の北部のリンバン省から中央部のビントゥル省、南部のスリアマン省をカバーして、個々のロングハウスの建替え、新規建造とその基本デザインをめぐる共同体内での合意プロセス、行政・地方政治家との交渉、およびそれぞれの世帯の建築資金源についての情報を得ることとした計画初年度から年度ごとに 10 から 15 程度のロングハウスを調査対象に選び、居住する河川流域と都市部への距離（アクセスの難易度）に関して多様性を考慮しつつこれを行うこととした。ロングハウス自体の調査には実測にもとづき精密な平面図、立面図を作成し、過去のロングハウスとの正確な比較を可能とすることを心がけた。

こうした調査にあたっての前提（仮定）は以下のとおりであった。

イバンはロングハウスでの集住について強い民族的自負心をもっているが、サラワクでロングハウスはイバンだけのものではない。これに関わる文化アイデンティティについては両義的なものがあると思われるが、これは現在サラワクに芽生えつつある「サラワク人のためのサラワク運動」に代表されるマレーシア国家における少数派民族集団という政治的に微妙な問題に関わるのでもあり、間接的なかたちでこれについての住民の評価を取材する。またモダンなロングハウスでの行動コードの刷新は、共同体に関わる儀礼の変化と家屋の象徴性の空洞化を引き起していることは確かであり、これについての住民の正負の評価はイバン社会の将来の強靱性を予測することに通じることから、証言集としてこれを確実に記録する。

この前提から了解できるところだが、本研究の手法は、現地における参与観察という、いわば伝統的な民族誌調査法にしたがった。時間的にも資金的にも、現地におけるフィールドワークを主とする研究であった。当初の計画にしたがうところでは、補助事業期間 3 年の間、最大限広域にわたる調査をこころがけ、サラワク州の北部のリンバン省から南部のスリアマン省、中央部東部のシブ省・カピット省をカバーして、個々のロングハウスの建替え、新規建造とその基本デザ

インをめぐる共同体内での合意プロセス、行政・地方政治家との交渉、およびそれぞれの世帯の資金源についての情報を得ることとした。

調査計画の進行に当たっては、現実には第３年度（2020 年度）から新型コロナウイルス蔓延にともなう日本国内、マレーシア国内、および両国間の通行に関する種々の阻害的な制約を受けたため、上記の研究方法を十全に遂行することが困難となった。2 度にわたる延長の結果、研究期間全体は５年に及んだが、実際に現地での調査を行い得たのは当初の２年度と最終の第 5 年度のみにとどまり、延長分の２年間に当たる 2020 年度、2021 年度は、国内にあってもっぱら関連文献資料および調査ノートの整理に従うこととなった。

４．研究成果

研究初年度にあたる 2018 年度は、マレーシア・サラワク州において正味 40 日に及ぶ現地調査を実施した。イバン人の集住共同体(ロングハウス）を数多く訪れ、その建築様式、変遷過程、家族構造、生業などを質的に比較した。調査地域は、サラワク州南部に位置する州都クチン、および隣接するスリアマン省、ベトン省、スリカイ省などであった。そのうち 2 件（2 ロングハウス）は、内堀が 1970 年代中葉からの変遷を継続的に観察し続けている共同体であり、建築様式の変化と社会・人口構成の変異を綿密に記録している。サラワク州内の地域によっては、集住家屋共同体の住民の空洞化なども観察されているが、本調査で対象とした共同体は換金作物としてのコショウ、あるいは（場所によっては）アブラヤシ栽培が経済的に軌道に乗っており、空洞化といった事態は生じていない。むしろ生活空間＝建築物としてのロングハウスの現代化の企画が顕著であり、若者層も部分的には都市部での労賃収入を得つつ、この企画に貢献している。2018 年度の調査結果の暫定的報告は、クチン市のイバン（ダヤック）文化財団であるジュガ財団において口頭で行った。

研究計画第 2 年度にあたる 2019 年度は。初年度にひきつづいて、サラワク州における最大多数民族集団であるイバン人のロングハウスと呼ばれる集住共同体（集落に当たる）を複数軒訪問し、その建築様式、変遷過程、家族構造、生業などを質的に比較するとともに、数量的にもデータとして蓄積するための現地調査を行った。この調査では、広域的な調査をともないつつ、一部の集落においては、長めの滞在をして、綿密で深厚な記述をも追究した。具体的には、6 月から 7 月にかけての１か月間、サラワク州中央部のラジャン川流域（シブ省、カピット省、ビントゥル省）の諸集落を調査対象とした。第 2 回目はビントゥル省の残りの一部と、北に隣接するミリ省、リンバン省の諸集落を対象として実行した。これらの調査は、前年度のサラワク州南部を対象とした調査に続くものであり、２年度にわたる調査によりサラワク北部の計画調査のおよそ半分を終えることができた。

また上の現地調査の期間中、サラワク州の州都クチン市隣接のサマラハン市において、マレーシアサラワク大学の学部および大学院生を対象とする講演を行ない、日本人によるイバン社会の研究の独自性を説明した。また研究において協力を得ているジュガ文化財団の研究機関誌である Ngingit 誌へ「イバン人の空間認知のあり方」に関する英文論文草稿を寄せ、これについて同財団所属の研究員および財団理事長と討議を重ねた。この論文は討議内容を含めて 2020 年度に同誌に掲載された。

このように本研究の主題にあたる調査、研究は初年度および第 2 年度はほぼ計画通りに遂行され、その成果も論文あるいは討議資料の提供というかたちで公開されたが、当初の研究計画第 3 年度かつ最終年度にあたった 2020 年度は、先述のとおり年度の全期間をとおして、予定していたサラワク州イバン人居住地域における臨地調査を行なうことが不可能になった。2020 年度の当初研究計画では、新型コロナウィルス肺炎症によっていくぶん先行きの見通せないとの前提の下で、8 月下旬以降の現地調査を執行し、これまでの 2 年間でカバーしえなかった地区、とりわけサラワク北部と中央部の内陸最奥部のロングハウスの現状を調査するつもりであった。この調査が執行できなかったため、研究は主としてこれまでに集めたデータの整理と論文執筆に集中することとなった。同様の研究環境は期間が 1 年延長された 2021 年度にあっても引き続いており、延長 2 年目の 2022 年度になってようやく短期の現地調査を再開したが、時間的制約のため本来 2020 年度に予定されていた地域での調査にまでは至らなかった。

研究期間全体に関わる具体的成果としては、サラワク州の各地方に在住するイバン人の現代化された集住ロングハウスを 20 軒以上観察し、そのうち 4 軒については一定の深度と数値をもったデータを得ることが出来たことがまず挙げられる。イバン人がサラワク州全土に広く居住している事実に照らして、実際にこの観察数ではサラワク州のイバン人ロングハウスを一般化して、その現代化にともなう諸現象、社会的・経済的背景を分析するには不十分である。だが、研究期間中の聞き取り調査にもとづいて住民の主観的認識を描くことは可能である。また調査期間中は同時に古い型のロングハウスに関わる回想的知識を収集することにも努めた。これによって、イバン人の集住形態の時代的に長期にわたる安定傾向と構造に関する地域的変異という時間空間的な広がりを追究しえたことも成果の一環である。

本研究による成果は、急激な生業的・経済的変化の只中にある島嶼部マレーシア（ボルネオ島）の非ムスリム系在地民（イバン人）社会の社会構造と家族構成の基層の持続性、およびそれと相たずさえて発現している民族意識の強靱性を明らかにしたといえる。その限りでは、この成果の社会的意義は地方的な限界をもつとはいえ、ここから発して東南アジア島嶼部の在地民社会に広く見られる「イエ中心社会」（house society）の今日のグローバル情勢と国民国家体制内での

持続の現実態の一範例を示しえたことは、この地域の民族学的知見に寄与する学術的意義があったと考える。

最後に、研究期間中に公刊した論文等のうち、本研究の課題・主題に関連し、本研究への直接的（一部は間接的）な寄与となるものを、解説・解題することにしたい（詳細な書誌は業績項目欄にゆずる）。

2018年の論文'The Spirit as the Other: From the Iban Ethnography' (in Kawai ed.2018)はイバン人の精霊とりわけ人間を狩って食らうという悪鬼的形象であるアントゥ・グラシの現れ方について書いたものである。ロングハウスの通廊で行なわれた儀礼の機会に、死んだシャーマンがこの精霊になった夢を見たという老女の語りを中心に民族誌記述を行い、イバンの精霊形象が自分たちの正負の自画像になっているという分析・解釈を導き出した。

2019年の論文「石について――非人工物にして非生き物をどう語るか」（床呂編2019所収）は、ものについての人類学的記述のなかでも扱われることのすくない生き物でもなく人工物でもない「もの」の記述方についての習作的な著述であり、さまざまな石のなかでも人間の居住域に近い見慣れたものを見る目の多様性に触れ、居住空間記述のあり方の一端を示唆した。

2020年の論文'In Which Sense Are the Iban Indigenous: Re-imagining Indigeneity in the Context of Double-tiered Statehood'は、イバン人の民族意識のあり方とその客体的な位置づけを、連邦としての国民国家（nation-state）マレーシア、および高度な自治権を有するサラワク州（マレーシアの州は英語ではstateと呼ばれる）という二重のステートの枠組で捉えたものである。イバン人社会の基礎をなすロングハウス共同体と民族意識の強靱性を考える上で不可欠の政治的枠組を提示した。

2020年の論文'Linear Space: Towards an Anthropological Interpretation of Spatial Perception and Representations of the Iban, based on Observations in the Upper Skrang'は先述のとおり、サラワクのジュガ文化財団の研究機関誌NGINGITに寄せたものであり、イバン人の居住空間としてのロングハウスの直線的・線形的な様態をイバンの方向感覚、地理感覚、世界感覚という感覚枠組、およびシャーマンの観る世界という表象空間との関連で論じたものである。イバン人のロングハウスとその各部分が彼らの宗教、儀礼、社会的価値体系全体にかかわるものであることを具体的に明かした。

2021年の論文'Rivers and Ridges: Changes in Perception of Environment and Landscape among the Upper Skrang Iban between the 1970s and the 2000s'では、川筋にあるロングハウスと、道路（多くは林道）の開通にともない道路端に建設されるようななったロングハウスの生業を対比しつつ、こうした開発による景観の変容と、食料生産・獲得法から料理、食事内容の変化まで、日常生活の転変とを論じた。

2021年の書評「佐久間香子『ボルネオ：森と人の関係誌』」はサラワク州北部に居住するブラワン人とペナン人の生業と生活の変化を森との関連で描く著作への書評であり、サラワクにおけるイバン人以外の先住民族の居住形態（ロングハウスの歴史を含む）の通時変化を中心に、民族意識と民族範疇との関連で論評した。

2023年の論文'Extinction as an Extreme: Its Entitative and Categorical Phases' (in Kawai ed.2023)では、サラワク州中部に住むブクタン人（ブキタン人とも）と呼ばれる人々、またタタウ人と呼ばれる人々の、部分的には民族人口の消滅に近い減少という事象に着目し、その減少についての人々の主観的評価と解釈を交えながら、極限的な生存の様相を文化-生態的ニッチェ形成とイバン人ほかの移住動態という客観状況との関連で論じた。この論文ではイバン人は客観状況の要素として扱われているが、総体としてサラワクにおける民族状況の中にイバン人をも位置づけている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計7件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 Uchibori Motomitsu	４．巻 16
２．論文標題 Rivers and Ridges:Changes in Perception of Environment and Landscape among the Upper Skrang Iban between the 1970s and the 2000s	５．発行年 2021年
３．雑誌名 NGINGIT	６．最初と最後の頁 8-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 内堀基光	４．巻 86（3）
２．論文標題 書評　井原泰雄・梅崎昌裕・米田穣編『人間の本質にせまる科学：自然人類学の挑戦』	５．発行年 2021年
３．雑誌名 文化人類学	６．最初と最後の頁 499-502
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Uchibori Motomitsu	４．巻 14
２．論文標題 Linear Space: Towards an Anthropological Interpretation of Spatial Perception and Representations of the Iban, based on Observations in the Upper Skrang',	５．発行年 2020年
３．雑誌名 NGINGIT (The Tun Jugah Foundation, Kuching)	６．最初と最後の頁 45-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 内堀基光	４．巻 58-2
２．論文標題 書評「佐久間香子『ボルネオ：森と人の関係誌』	５．発行年 2020年
３．雑誌名 『東南アジア研究』	６．最初と最後の頁 274-277
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Uchibori Motomitsu	4．巻 51
2．論文標題 In Which Sense Are The Iban Indigenous? Re-imagining Indigeneity in the Context of Double-Tiered Statehood	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Hitotsubashi Journal of Social Studies	6．最初と最後の頁 45-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 内堀基光、高橋絵里香	4．巻 82-4
2．論文標題 AAGE第10回研究大会報告	5．発行年 2018年
3．雑誌名 文化人類学	6．最初と最後の頁 574-577
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 内堀基光	4．巻 87-4
2．論文標題 書評 「稲村哲也、山極壽一、清水展、阿部健一編著・『レジリエンス人類史』」	5．発行年 2023年
3．雑誌名 文化人類学	6．最初と最後の頁 683-686
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 内堀基光
2．発表標題 イバン集住空間に見る命の消長
3．学会等名 日本文化人類学会第53回研究大会
4．発表年 2019年

１．発表者名 Uchibori, Motomitsu
２．発表標題 Characteristics of community of care: hunter-gatherers in the light of swidden cultivators
３．学会等名 The Twelfth International Conference on Hunting and Gathering Societies（国際学会）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計5件

１．著者名 河合香吏（編）、内堀基光	４．発行年 2020年
２．出版社 京都大学学術出版会	５．総ページ数 578
３．書名 極限――人類社会の進化史的基盤	

１．著者名 床呂郁哉・河合香吏（編）、内堀基光	４．発行年 2019年
２．出版社 京都大学学術出版会	５．総ページ数 299
３．書名 ものの人類学2	

１．著者名 Kawai Kaori (ed.)、Uchibori Motomitsu	４．発行年 2019年
２．出版社 Kyoto University Press and Transpasific Publisher	５．総ページ数 500
３．書名 Others:The Evolution of Human Sociality	

１．著者名 Kawai Kaori(ed.)、Uchibori Motomitsu	４．発行年 2023年
２．出版社 Kyoto University　Press and Transpasific Publisher	５．総ページ数 618
３．書名 Extremes: The Evolution of Human Sociality	

１．著者名 伊藤 詞子	４．発行年 2022年
２．出版社 京都大学学術出版会	５．総ページ数 344
３．書名 たえる・きざす	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			